

日本郭沫若研究会事務局

二〇〇九年二月十五日発行

郭沫若研究會報

【郭沫若九大留学九十周年記念 郭沫若研究国際学術集会】特集

第十一号 (総No.12)

目次

【郭沫若九大留学九十周年記念 郭沫若研究国際学術集会】

日時：二〇〇八年九月一日（月）～二日（火）

会場：九州大学医学部基礎研究A棟1F講義室

【郭沫若研究国際学術集会】特集

〈主催〉
日本郭沫若研究会

〈後援〉

九州大学大学院医学研究院

九州大学アジア総合政策センター

日本聞一多学会

大会プログラム

研究発表のプログラム

研究発表の概要集

ご寄付への感謝

編集後記

プログラム

九月一日 学術集会

9:00 受付開始

9:20 開会式

（使用言語 中国語・日本語）

開会の辞

祝辞

祝辞

歓迎挨拶

挨拶

祝電

日本郭沫若研究会会長

九州大学医学研究院長

中国駐福岡総領事

大会主席・前九州大学総長

北京郭沫若記念館館長

中国駐日本国特命全権大使

岩佐昌暲

高柳涼一

武樹民

杉岡洋一

郭平英

崔天凱

日本郭沫若研究会事務局

〒八六二一八六八〇熊本市大江二一五一

熊本学園大学外国語学部岩佐研究室気付

FAX〇九六一三七二一〇七〇二

電話〇九六一三六四一七〇九八（直通）

9:50 基調報告 中国郭沫若研究会副会長 蔡 震

10:20 報告(報告番号2~10)

11:50 午前の部終了

12:00~13:00 昼食

13:00 午後の部開始

報告(報告番号11~16)

14:10~14:20 休憩

14:20 報告(報告番号17~22)

15:30~15:45 休憩

15:45 報告(報告番号23~28)

16:55 閉会

閉会の辞 日本郭沫若研究会副会長 藤田梨那

17:00~17:30 郭沫若碑、郭沫若書見学

17:30 移動(天神へ。公共交通)

18:00 懇親会(福岡ガーデンパレス)

20:00 解散↓福岡夜景見物

九月二日 郭沫若文学史跡めぐり

8:30 箱崎周辺(称名寺、箱崎宮、網屋町等)、今津元寇防塁跡

博多湾、佐賀県北山熊の川温泉(郭沫若碑、温泉「玉家」で入浴

食事)、大宰府天満宮、博多。

17:30 博多駅筑紫口にて解散。

開会の辞

岩佐昌暉

日本郭沫若研究会会長の岩佐です。一言ご挨拶もうしあげます。今年、郭沫若が九大に入学して丁度九十周年に当たりますが、同時に郭沫若の逝去三十周年という節目の年でもあります。

同時に郭沫若研究会では、かねてからこの節目の年に、郭沫若がその文学・学術活動を開始したこの福岡の地で、全世界の郭沫若研究者によびかけ、とくに「郭沫若と日本」および「郭沫若研究の現代的意義」に焦点をしばった国際学会を開催し、郭沫若研究の発展をはかりたいと考えてまいりました。このたび、ほぼ一年余にわたる準備を経て、本日学会を開催する運びとなりました。学会には、中国から十八名、韓国から一名の合計十九名の外国人研究者が、また、日本国内からは約三十名の研究者が参加し、合計二十八本の報告が行われます。

中国文学関係の学会で、これだけの規模のアジアの専門研究者が一堂に会し、研究交流を深めることはかつてなく、この学会は研究史上画期的なものであると自負しています。学会のもつこのような意義から、九州大学大学院医学研究院、九州大学アジア政策研究センターの後援をいただき、また郭沫若と同時代の文学者である聞一多の研究団体・日本聞一多学会からも後援をいただいています。なお、この学会の主席は杉岡洋一前九大総長にお願いしていますが、杉岡先生は郭沫若が戦後初めて日本訪問したとき、九大で組織された歓迎委員会の学生代表を務め、さらに今年三月には一九五八年医学部卒業生の同窓会・燦燦会による医学部図書

館前の郭沫若記念碑建立に努力された方です。当会がこの学会の主席をお願いしたのは、杉岡先生のそのような郭沫若との縁によるものです。

大会は九月一日、二日の二日間ですが、第二日目は、郭沫若文学史跡の参観旅行に当てています。これは、九州に来られたことのない中国研究者に郭沫若の生活した場所（ほとんどはかつての面影を残してはいませんが）を見て、感性的な認識を深めていただき、もって、初期郭沫若文学への理解をより全面的なものにしてほしいと考えているからであります。当日は、郭沫若の文学と関わりのおふかい、箱崎宮付近、今津海岸、大宰府、佐賀熊の川温泉に参ります。

このたびの中国側の参加者はいずれも著名な研究者ですが、ちよつとここで、ご紹介を申し上げておきますが、まず挨拶をお願いする郭平英女史は郭沫若の次女、現在北京郭沫若記念館館長、中国社会科学院歴史研究所副所長です。次に冒頭の基調講演をお願いする蔡震氏は中国科学院文学研究所員、中国郭沫若研究会副会長（実質的な会務の遂行者）で、いま最も活躍している郭沫若学者です。また唯一の韓国人学者・朴宰雨教授は韓国における現代中国文学研究の第一人者で、韓国中国現代文学学会会長として国際的に活躍している方です。時間の関係でいちいちご紹介いたしません、ご参加の方々はいずれもこの領域では抜群の知名度をもつ東アジアの有力研究者で、こういう人たちとともに研究交流ができる喜びを私個人も感じております。

最後になりますが、この二日間の会議が皆様のご協力を得て、成功裏に終ることできますよう、そしてこの会議が東アジアの

学术交流史に新たな一ページを記すことのできるものになりま
すよう祈りまして、私の挨拶を終わります。有難うございました。

歓迎の挨拶

大会主席・九州大学前総長 杉岡洋一

郭沫若先生の九州大学入学九十周年を記念して開催されます、郭沫若研究国際学術集會に遠路国外また国内より多数ご出席賜り、誠に有難く厚く御礼申し上げます。

また、公務多端の折、祝辞を述べてくださいました中華人民共和国在福岡総領事館 武総領事様、九州大学医学研究院長 高柳教授に深謝申し上げます。

郭沫若先生は、私が医学部専門課程の二年でありました、一九五五年十二月に中国科学院訪日学術視察団長として母校を訪問されましたが、私は郭沫若先生歓迎の学生代表として、先生のお世話をする光栄に浴しました。

医学部中央講堂で格調高いご講演を拝聴いたしました、先生が講演の中で「母校と医学部の恩師から、人、人類を愛する精神を学び、その結果今の自分がある」と述べられたことが、強烈な印象として私の脳裏に刻み込まれました。

先生は難聴のため医師の道を断念され、文学の道を志されて中国近代文学の巨星と称される功績を挙げられましたが、その一方で革命に身を投じられ、医療の面で人を助けるよりも多くの、数億の民を救われました。そのような偉大な先輩を持ったことは、

われわれ医学部の誇りであり、また、そのような偉大な人材を育んだ九州大学の榮譽でもあります。そこで、今後九大医学部の後進が郭沫若先輩の業績に刺激され、九州大学の誇りを胸に、世界の人々に貢献することを願うばかりです。

今年が、奇しくも私も一九五八年医学部卒業生、燦々会の卒業五十周年にあたりますため、後輩への前述の願いを込めて、私は、五十周年記念に郭沫若先生の顕彰碑を医学部構内に建立することを提案いたしました。燦々会全員の賛同が得られ、医学研究院教授会の了承の下、中国産出の石材に日本郭沫若研究会会長である岩佐九州大学名誉教授の碑文が刻まれた顕彰碑が完成し、燦々会の五十周年祝賀会が行われた三月七日に郭沫若先生のお孫さんである藤田梨那国士館大学教授と、岩佐先生により除幕が行われ、郭平英郭沫若記念館館長より祝辞を頂戴いたしました。郭沫若先生は、母校訪問時に数々の書を残されましたが、その一つは孫文の扁額と並んで九州大学総長室に飾られております。本日の学術講演終了後に前述の顕彰碑と医学部図書館に保存されております郭沫若先生の直筆による先生の詩をご見学いただく予定になっております。

最後になりましたが、郭沫若先生の九州大学入学九十周年を記念した本国際学術集会が実り多く、大きな成果を挙げられますことと、郭沫若先生が若き時代を過ごされ、先生の多くの思いが残る、医学部、福岡、佐賀の古湯などご訪問くださいまして、今回のご旅行が意義深いものになりますことを心より祈念申し上げます、挨拶いたします。

祝辞

日本郭沫若研究会：

欣聞貴会将于九月一日、二日举办「郭沫若九大留学九十周年纪念郭沫若国际学术研讨会」，谨此祝贺！

郭沫若先生是中国现代著名的作家、文学家、诗人、剧作家、考古学家、思想家、古文字学家和著名的革命活动家。郭沫若先生早年赴日本留学，先学医，后从文，深受西方文学、科学与革命思想薰陶。他才华横溢，积极投身学术研究、新文化运动和爱国救亡运动，为中国的文学、史学、文字学等的发展和中國革命的成功做出了杰出的贡献。

郭沫若先生跌宕传奇的人生深深烙上中日关系曲折发展的历史印记。研究郭沫若不仅具有文学方面的意义，而且对我们以史为鉴、思考中日关系的发展亦具有重要意义。

祝本次纪念活动和研讨会取得圆满成功！

中华人民共和国驻日本国特命全权大使

崔天凯

二〇〇八年九月吉日

研究発表のプログラム

「郭沫若与日本」在郭沫若研究中
文物与图片专题展

蔡震

——「跨着东海——郭沫若与中日文化交流」—— 郭平英

留学生・中国科学院院長の郭沫若が見た福岡・博多

1905 年代的郭沫若及其抗战抗战历史剧

郭沫若歴史劇と焦菊隱

郭沫若の英詩訳

郭沫若…在文学与政治背后的医学眼光

『女神』における詩的言語としての科学

沫若《女神》与毛泽东诗词

——中国现代诗歌主体精神建构的一种模式

郭沫若初期詩歌における大正期日本詩歌の影響

郭沫若…浪漫主义文心与诗论

郭沫若的甲骨研究——郭沫若与田中慶太郎

「歌斯迭里」の文学史意义

——郭沫若的自我定位与我们对郭沫若的定位

横站…青年郭沫若——以《论中德文化书》为例

郭沫若と聞一多

——聞一多の郭沫若『女神』評価を巡って

郭沫若の古代研究

——近代学術におけるその位置づけ

韩国接受郭沫若的历史与特点

——包括新发掘的资料

郭沫若著作在人文社的出版及其编辑出版活动

郭沫若留学日本的多重人生意义

郭沫若の万宝常研究の動機に関する考察

在漂泊中寻找归属

——郭沫若身边小说中的身份焦虑与自我建构

岸田憲也

贾振勇

瀬戸宏

大高順雄

陈 俐

横打理奈

陈晓春

岩佐昌暉

黄曼君

成家徹郎

李 怡

廖久明

鈴木義昭

牧角悦子

朴宰雨

岳洪治

税海模

藤田梨那

魏紅珊

泰戈尔究竟怎样影响了郭沫若

狂暴与柔情——博多湾赋予《女神》的两种性格

『女神』と海水浴

郭沫若がしたためた聶耳墓志銘の削除問題について

知识分子立场及其异化

——论郭沫若的文艺大众化思想

《女神》…男人的生命歌唱

郭沫若早期诗风、诗艺的选择与白话新诗的可能性

郭沫若の佚文「雁来紅」について（ペーパー参加）

【研究発表の概要】

郭沫若研究における「郭沫若と日本」

郭沫若の文学創作と学術研究は彼の日本生活と密接に関連する。日本は一つの地域という概念だけでなく、彼の生活と活動における一つの社会環境、文化環境なのである。従って、「郭沫若と日本」は当然郭沫若研究の重要な課題となる。しかし現段階ではこの方面の研究はまだ手薄で状態である。多くの未知数と空白が存在する。このような状態を来たした原因は二つある。

一、関係資料の欠如である。郭沫若の日本留学期と亡命期の資料はなお不完全である。

二、学術的に「郭沫若と日本」という課題に対する関心が足り

魏 建

武継平

小崎太一

齐藤孝治

张传敏

周海波

朱寿桐

小谷一郎

蔡 震

ない。この課題を研究視野に入れる学者が少ない。その理由は研究の出発点にあった誤解による。すなわち郭沫若自身が日本との関係についての発言重視である。

「郭沫若と日本」を研究するに当たって必要なことは…

- 一、史料について系統的な収集、整理、校訂を行う。
- 二、郭沫若の日本観から、日本社会と文化に彼がいかなる姿勢をとっていたかを明らかにする。
- 三、「女神」時代の詩歌創作と日本文化の関係。
- 三、郭沫若の儒家思想の解釈と日本文化の関係。
- 四、日本近代文学思潮の変移を背景に、郭沫若の文学主張と文芸思想を考える。
- 五、日本プロレタリア文芸運動から郭沫若の「転向」とプロレタリア文学提唱を考える。

郭沫若——文学と政治の背後にある医学の視点

陈俐

単純に郭沫若を「x x家」と簡単に称することは、決してこの中国現代史の奇才を理解するのに役立たない。彼に付した様々の肩書きは医師という事実を隠蔽してしまった。郭沫若は八年間日本で医学を学び、厳格な医学と科学の訓練を受けた。このことは後に彼が社会を観察し、中国の解放を模索する過程で独特な視点を形成した。医学の角度から病気を観察するとき彼は客観的な態度で病気の真相を指摘する。従って、彼は病氣隠喩の批判者であ

る。一方、詩人と医者との二重の視点から病気を透視する時、彼は却って多くの病氣のイメージによって生命感情の衝突を表し、病氣描写の逆説となる。初期の小説に彼は多くの「結核美女」を作り、しかもこれらの「結核美女」に「タブー」の性質を与える。作者の潜在意識では彼女たちは恋愛、愛欲の対象であると同時に情欲のタブーでもある。これらの「結核美女」は倫理道德と生命、感情との衝突を表す。抗日戦争期に、郭沫若は単純に政治の角度から民族問題を考えたのではない。医学と文学の考え方の総合浸透によって、多くの医学的言説が政治と軍事的隠喩となり、傷口の「腐乱」と「治癒」は、民族が死から生へと蘇る象徴となる。

沫若《女神》と毛沢東の詩歌

—中国現代詩歌の根本精神の様式—

陈晓春

郭沫若と毛沢東は詩歌創作の内在的精神、氣質において近似性を持つ。この近似性は詩歌の根本精神様式の近似性による。

《女神》の雄渾さ、広大さはまさに作者の「自己主体化」に基づいている。「自己主体化」は郭沫若の自我に対する崇拜による。毛沢東の詩において、われわれはこれと同様の主体性を感じられる。その氣迫、胸襟と創造力は郭沫若の「天狗」に劣らない。強烈な「主体化」を表している。《女神》の「自己主体化」が生命そのものに対する自我の置き換えといえるなら、毛沢東詩の「自己主体化」は彼が初期に提唱した「貴我」の人生観と倫理学に由来するといえる。

《女神》の「自己主体化」のエネルギーは五四期の時代精神に由来し、主に精神世界における破壊と創造の中で時代精神と融合

する自我を表す。毛沢東詩の「主体化」のエネルギーは「欲與天公試比高」の胸襟、氣迫と「敢教日月換新天」の無限な創造力に由来する。

文物とパネル展示

東海を跨って——郭沫若と中日文化交流

郭平英

郭沫若は嘗て日本で二十年間生活しことがあり、日本を第二の故郷と呼んでいた。日本留学中に新しい文化への躍進を実現した。一九二八年以後、彼は日本で研究に没頭し、活力を蓄えた。古代社会研究の世界で唯物史観の道を切り開いた。抗日戦争が始まるや彼は身を救国運動に投じ、日本と世界の人々に戦争を止め、世界文化を救うために奮起するよう呼びかけた。平和のため、中日国交正常化のために、彼は両国の学術、文化、各界の朋友に真摯な友情を植え付けた。中日民間友好のために東海を跨る大橋を掛けた。

展示の四つの部分…

- 一、 海外へ救学、創造の門を開く。
- 二、 逆境で知り合う、非常時代を検証する。
- 三、 甘苦を共にし、戦火の中を去来する。
- 四、 蒼海桑田、文交流が輝く。

中日平和友好条約成立三十周年を記念するため、郭沫若記念館は豊富な歴史パネルと文物によって中日文化交流に残した郭沫

若の足跡、面影を回顧し、人々に歴史認識を深め、総合尊重、平和発展への信念を更に強めるものと信じる。

郭沫若…浪漫主義文心と詩論

黄曼君

「詩の創造は人の創造であり」、完全なる「全人格」の「人」を創造することだと、郭沫若は考える。このような純物性でもなく、純理性でもない「人」の観念を鑑みて、彼の芸術的自我表現、自然流露の観点（靈感の爆発状態も含めて）に対して、これらを感情と情緒の簡単な複写や自然の流露と理解してはいけない。むしろ自我の感情形態を芸術的創造的発見と構築をする過程と理解すべきである。即ち、一方において、「感情の美化」を中心に、「いささか矛盾の結晶体」を帯びた「完全」な「全人格」を作り出す。もう一方においては、認識的、心理的の作品構成の様々な過程を分析する。「体相兼備」「体相如一」を求める。彼の浪漫主義を主導としながら、同時に現代主義の観念、方法を持つ、特徴、彼の浪漫詩学が呈した芸術無目的と功利価値並存の矛盾な構造、彼の「情緒自然消長」を内容とした無形式的形式の観点、文学批評が「発見」だと主張する彼の主体的特徴などは、みな彼の人学観念を強化し、詩歌による創作実践と理論観点をして一代の浪漫主義詩風、文風を作り出し、開拓的な意義を持つ。

一九四十年代の郭沫若とその抗戦歴史劇

一、「憤怒から詩人が生まれる」…政治での挫折と芸術への転移郭は「士」として「仕」え、二重の身分で社会や政治の舞台で活躍したが、名声や財産は絶対に最終的な目標ではなく、信奉する社会政治の理想のために絶えることなく努めたのが、主要な精神的な動力源だったはずだ。抗戦歴史劇は憤怒する詩人が政治的な挫折の後に戯曲の王国で実現した詩と政治の激情の遭遇だった。

二、「政治檄文の一つの高峰」…審美の暗黒政治への抗議 歴史悲劇精神の悟りと芸術的再現が、あの時代に最も多くの人々の内心の要求と良心的なうめきに反応して、郭をあの時代で最も現実を批判し、もっとも大胆に気概を示した文人にさせた。政治と芸術が歴史精神の展開の中で密接に交わり、暗黒の世界に審美的で政治的な檄文を生み出した。

三、「人を人として扱う」…人文的な賛美の詩とユートピアの想像 抗戦史劇での戯曲芸術の悲劇価値や崇高価値への体得と記述が、人類の社会やその歴史、人の本質的存在の諸々の当然性などの命題と反応し、一時の政治的な武器となったが、一人の文人知識分子の良心と天性が、彼を芸術世界で独立し、自尊的で、厳格な品格を保たせ、さらに彼に雄大な華麗な戯曲芸術を通して、人の存在の真の理由——自由を把握させた。

「ヒステリー」の文学史的意義

——郭沫若の自我の位置づけと我々の郭沫若への位置づけ

李怡

中国現代文学史上で、郭沫若のように主流意識の評価と民間で話される様々の「うわさ」中との巨大な差がある者は他にはいないだろう…前者の賛美と後者の貶めは普通な文学読者に寄る辺なさをほとんど感じさせるほどで、学術圏内に現れた寄る辺なさは郭沫若研究の停滞の部分的な原因だと言つてよい。今日、我々はこの論争が非常に多い文学者を一体どのように位置づけたらいいのだろうか？私が思うに、我々は一人の評論者として現在流行しているある種の人生や芸術の原則に沿って郭沫若を位置づける前に、まず郭沫若本人の基本的な思考の筋道と意識の方向を整理し、文壇に上った彼が一体どのように自分で選択したか、またこの選択をどのように描写したのかを見てみるべきだ。

ここに郭沫若自身の「自我位置づけ」の問題がまず存在するのであり、ヒステリーという語は今日ではよくマイナスの意味に用いられているが、その病理学の最初の意味を追求すれば、ある落ち着きのない性格を表しているにすぎず、敏感な感受能力を持つ人に多く発生し、外部世界の圧迫と関係があった。客観的に論ずれば、揺れ動いた二十世紀に生きた中国人の文人で、現実を回避せず感情が豊富であれば、このような精神特質を皆大理解することができると注意すべきは、独り立ちし人生を歩み始めたばかりの、医学を学んだが文学を選択した郭沫若がこのような性格氣質に高い賛同を抱いたことである。『創造十年』に、早期の自伝と書信に、留日時期の小説に、我々は至る所に郭沫若の「ヒステリー」描写と表現を読むことができる。

「ヒステリー」を捕まえてしまえば、郭沫若の「五四」前後の文学創作の窓口を発見するのだ。郭沫若一生の長い芸術の道のりで、あのあがきと困難に満ち、あの矛盾が続出し、自己否定をした過程は、ここからある種の解釈を得られるのではないだろうか…

社会文化のあまたの領域に広汎に介入したのはつまり動乱の中での自らを探し出す努力ではないのか？たゆまず「時とともに進」んだのはつまり焦りを克服するある種の方法だったのでないのか？

民族文化の生存背景から言えば、あせりは二十世紀中国と外国の文化の巨大な衝突の結果だった。現代中国知識分子の精神発達史から言えば、あせりはさらにある種典型的な民族性格の「症候」だった。

横立ち・青年郭沫若

——「中独文化を論じる書」を例に

廖久明

「中独文化を論じる書」は一九二三年に創作され、この時郭沫若は30を迎えたばかりだった。その文章が明らかにしているが、青年郭沫若も魯迅と同じように以前は「横立ち」していた。科学と玄学の論争はと言えば、郭沫若は科学派の方に立ち玄学派に反対したが、科学派の主将丁文江は郭沫若が儒家文化思想の道筋にある陸九淵・王陽明心学を引き入れたと猛烈な批判を行い、玄学派の主将張君勱の玄学の方が郭沫若の信奉していた儒家の学説と相通する点があった。東西の文化はと言えば、インド文明と西洋文明への態度が同じでないために、郭沫若は自分と同じく孔子を崇拜している梁漱溟を批判した。社会主義論戦から言えば、郭沫若は早期マルクス主義者の方に立ち、張東蓀を代表とするギルド社会主義に反対したが、マルクス主義者の陳独秀は孔子に反対

しており、そして郭沫若『女神』の大部分の詩は『時事新報』の副刊『学灯』に発表され、当時『時事新報』の責任者は張東蓀だった……これらの事実から見られるように、青年時期の郭沫若が従ったのは自己が認める真理であり、自己の観点と一致すれば支持し、一致しなければ批評意見を出し、近親感や好悪で変えたりせず、貴重な「横立ち」の態度を表している。

郭沫若日本留学のもつ多重の人生的意義

税海模

郭沫若にとつて日本留学は少なくとも三重の意義があった。第一に、郭沫若は日本留学によつて幸いにも西洋文化の洗礼を受け、「人」を「発見」し、中国の礼教（儒教的規範）の壁を破り、真の意味の「人」をうたう著名な現代詩人となった。第二に、日本留学によつて青年・郭沫若はすでにもつていた国学（中国古典などの学問）の基礎の上に、西欧の人文科学と自然科学の両方面においてもきちんとした訓練をうけた。こうして彼は学は東西を貫き、文理ともに長ずるといふ知識構造を形成し、後に学術研究に従事するための良好な学問的な蓄積をおこなった。第三に、郭沫若は九州大学医学部を卒業後、二四年四月福岡に帰り、九州大学で石原博士に就いて生理学を学ぼうとしたが、うまくいかなかった。このとき、河上肇の著作を翻訳したことで、マルクス主義を受け入れ、新しい時代を生み出す助産婦にならうと決意した。これより以後、彼は自覚的に中国現代革命イデオロギーの主要な解

釈者、宣伝者の一人となった。——これは郭沫若日本留学の余波とみなすことができる。このほか、郭沫若の日本留学期間中の学習方法と当時の日本の大学の教育方針は、現在の中国の大学が、いかにして優れた研究者を養成するかということにとっても、一定の啓示的な意義をもっている。

漂泊しつつ帰属を尋ねる

——郭沫若身边小説における身分模索と自我の構築——

魏紅珊

アイデンティティーは、移民が異域で自我描写と帰属模索における精神的寄所である。二十世紀初期日本に留学した郭沫若を例にすると、彼はアイデンティティーの危惧を身边小説に表現し、身分変化と構築の難しさを演繹した。本論分の趣旨は、「愛牟」を主人公とした郭沫若の身边小説の分析を通して、テキストに隠されたアイデンティティーの焦りを探ることである。

郭沫若は現代知識人が味わった異域での身分変化と構築の難しき、切ない現実生活や人生の境遇を読者の前にさらけ出す。巧みに海外知識人の身分危惧と文化的苦悩を表した。第三世界の中国文化が先進国家文化の優勢と覇権に直面した境遇を暗喩した。ある意味において、彼の小説中の人物の異文化認識と身分危惧は中国文化と社会の相対的連携を持つ。また彼の小説はまた海外知識人の身分模索と自我の構築の縮図でもある。

郭沫若におけるタゴールの影響

本論文は、郭沫若関係資料特に日本留学期の佚詩と佚文の考証を通して、関係事実を証明すると同時に、先行研究で未解決の問題を解明する。例えば、最初に郭沫若の詩歌に影響を及ぼしたタゴールの詩歌はどれであるか。郭沫若はなぜタゴールに共鳴したのか。タゴールに接した時、英文のタゴール詩は郭沫若にどのような影響を与えたか。郭沫若をタゴールに接近させた外的力はあるか。汎神論のほかにタゴールは郭沫若にどのような精神的影響を与えたか。

一つの例を挙げる——「タゴール詩風」と郭沫若の関係。本論文は、郭沫若がタゴール詩に対する鑑賞を、新詩創作において受容した「タゴール詩風」と見なしてはいけな、と考える。《女神》以外の郭沫若初期の佚詩から見て次のことが分かる。一、タゴール詩歌対郭沫若の影響は「清新」の二文字で表現できない。二、タゴールの対郭沫若の影響は決してフィットマン以前とは限らない。少なくとも一九二〇年末まで及ぶ。三、タゴールの影響は郭沫若の新詩の口語体、散文化と叙述式に現れる。

博多の海が『女神』に与えた二つの性格

武継平

「現代」という意味において、中国現代文学史上初めての新詩集といふべき『女神』が日本の博多湾に生まれた。若き無名の詩人だった郭沫若は当時一介の、医学専門の支那留学生に過ぎな

魏建

った。しかし、なぜ博多というなじみのない異国の環境の中で祖国の「五四」時代を代表できる声を歌いだすことができたのだろうか。博多という独特な地域文化と郭の『女神』の誕生との間には、いったいどんな必然的な関連要素があるのだろうか。

『女神』の創作が郭沫若の留学生活となんらかの関係があることはいうまでもない。福岡にある九州帝国大学医学部に留学していたころ、郭ほどのような精神状態だったのか。彼の日常生活、人間関係、そして彼自身の感情の変化にはいったいどんな「特別なこと」があったのか。彼の目に映った博多湾の自然と大正時代の日本文化といった外部世界はどうなっていたのか。異国の環境の中で留学生郭沫若に『女神』を生み出させた何かの決定的な要素があるに違いない。もちろん、それは郭の内面にあるものと彼を取り巻く環境の要素との両方を指す。

『女神』という詩集は、「スケールの大きい詩」と讃えられる作品は殆ど「海」と何らかの関係をもっている。そして、この海のイメージから生まれたイメージーションは作品群の中から噴出する太陽謳歌、光明謳歌、生命謳歌の詩情と暗黒の世界をこっぴみじんに粉碎しようとするパワフルな、時には狂暴さを感じさせる生命の力を生み出したのである。

本発表は『女神』の基調をなす作品の創作の背景およびきっかけについて実証的な考察を行なったものである。

人民文学出版社による郭沫若の著作出版及びその編集

岳洪治

郭沫若は二十世紀以来、中国の最も傑出した、また最も影響のある人物のひとつで、中国現代文学、歴史学、文字学上において、様々な素晴らしい功績を残している。同時に、刊行物を編纂したり、雑誌を出版したり、出版社を創業したりした。作品発表や編纂・出版活動の場所に関して、一九四九年以前は上海・重慶・上海へと移り、建国後は主として北京で、ほとんど全ての著作は人民文学出版社から出版された。郭沫若の著作が人民文学出版社から出版されたことは、間接的に半世紀もの間の新中国の文化出版事業の発展の行方を反映している。

「文革」前の十七年、「文革」十年、「文革」終結・改革開放後の三十年といったこの三段階において、郭沫若の著作は人民文学出版社から出版され、それぞれ異なった運命と動きを見せた。「文革」前の十七年において、郭沫若の著作に関する出版は人民文学出版社による独占であった。「文革」中に関しては、著作の出版が極度に減少した。改革開放後の三十年は、著作の出版が最も栄えた時期である。郭沫若は革命家や学者というだけではなく、作家としてのイメージとともに百年来の中国史上で、傑出した編集・出版家であると言える。同時に、中国文化出版事業に大きな貢献も果たしたと言えることができる。

『女神』…男による生命の歌

周海波

『女神』の価値はどこにあるのか？どのようにして当時の精神を理解したらいいか？しばしば二十世紀の時代的精神を「五四」時代の精神と同じだと考え、郭沫若個人の生命体験を見落としてしまいがちである。「五四」時代の社会意識と精神の特徴を『女神』と同じように見てはならないし、郭沫若の精神世界と同じとも見てはならない。むしろ郭沫若個人が生活の中で感じ取って来たものから詩人としての精神世界を理解していくべきである。郭沫若の詩歌創作は自らの体験や感じ取ったものから始まるものであって、ある既定の時代精神から始まるのではない。偉大な詩人は時代や社会から感じ取るものは深く、また前世を超えるものがあり、彼らはある方面から時代や社会の特徴を知ろうとする。しかし、偉大な詩人はしばしば自らが感じ取って来たものから社会や時代を知ろうともして、訳もなく社会的な感受精神を生み出すことはない。『女神』は生命の歌であり、男の歌でもある。もし聞一多のように『女神』の時代精神はまず「動」の精神だといふのなら、この「動」とはまず生命の「動」であり、ある生命の動くさまであり、ある若い男の生命の歌である。『女神』は男性的に歌いあげること、男性の生命のリズムを描き出していると言えよう。

知識分子の立場と異化

— 郭沫若の文芸大衆化思想について論ず —

張傳敏

郭沫若は若い頃の作品の中で大衆の思想に向かつていかなければならないと言っているが、これは決して知識分子に対して批

判する「大衆化」ではなく、一貫して知識分子は階級理論である「化大衆（大衆と化す）」を用いることを主張している。

郭沫若は延安での整風運動及び文芸座談会前後の状況を知つてようやく「大衆と化す」という言論を変えて、知識分子は「大衆化」しなければならぬと強調し始めた。しかしこの時期、郭沫若は「大衆化」という言葉の裏で、やはり「五四」以来の知識分子の歩みを肯定しようとしていた。「文革」が発動されると、彼はようやく激しく自己批判して、かつて自らが歩んできた知識分子としての道を全面的に否定した。

郭沫若が知識分子としての身分を「異化」させてきた過程には大変意味がある。論理的には、「革命」「大衆（人民）」は決して知識分子を抑制させる必然性はない。かなりの割合で、郭沫若にとって知識分子の身分を「異化」させることは強いられた、偶然の個人の政治的産物かもしれない。

郭沫若の初期詩風、詩的技巧の選択と白話現代詩の可能性

朱寿桐

本報告で論証しようと思うのは、『女神』が白話現代詩の情感の方式およびその表現の策略に対して規範的性格（少なくとも一種の規範性）となりえているのは、詩人郭沫若の詩性（詩人としての諸要素）が作り上げた力の体現というよりは、むしろ彼の詩性の選択の結果というほうがいい。白話現代詩の開拓者・創造者

の一人として、郭沫若は白話現代詩に対し、情感の方向性、表現の方法から詩歌の風格と言語の策略にいたるまで、さまざまな試みをおこなった。少なからぬ数の、『女神』には収められていない散逸した詩群が証明するように、『女神』との比較において、これら散逸した詩群の分析によって、初期郭沫若の詩風、詩的技巧の選択の軌跡がはっきりと浮かび上がるのであり、さらに進んで白話現代詩が初期段階に内包していた多重の可能性を体現していることがわかるのである。

韓国における郭沫若受容の歴史と特徴 新たに発掘された資料を含めた考察

朴宰雨

韓国における中国新文学の紹介は一九二〇年から始まっている。日本帝国が強行占領していた時期に韓国が受け入れた中国人と作品はかなり多い。しかし最も重視されたのは胡適、魯迅および郭沫若ら数人であった。

郭沫若は一九一九年に詩歌、文、小説などの発表を始めた。だが彼の作品は一九二二年末になって初めて韓国語訳され韓国の雑誌に登載された。それが「東明」第十七号に掲載された「春を司る女神の歌」である。後、日帝強行占領期にも彼の作品と理論的文章の韓国語訳は断続的に韓国の新聞・雑誌に発表され続けた。だが、一九五〇年の朝鮮戦争時期から一九九〇年以前までは、作品の翻訳と研究は中断され、一九九〇年になってようやく再開さ

れた。

筆者は2002年に「韓国における郭沫若」の状況を紹介したことがある。韓国の学界の郭沫若作品にたいする翻訳・研究状況の簡単な紹介だった。しかし、第一に二〇〇六年私が院生たちと「日本帝国時期における中国現代文学受容史の研究」の資料の発掘と整理をおこない、その結果、郭沫若に関するいくつかの新資料を発見したこと、第二に、過去六年の間に、韓国の郭沫若翻訳と研究の上で、新たな研究傾向が現れたこと、この二点のために再整理をおこなう必要が生まれた。

新たに発見された日帝強行占領期の資料には、翻訳と研究の二つの方面がある。翻訳では詩「黄浦江口」、「黄河與揚子江」、「雨後」、「RECONVALESCENCE」、「夜半」と詩劇「湘累」および評論文「文学革命的回顧」、「文学與革命」があった。研究では李達の「郭沫若論」（雑誌連載の文章としては第2回、第六回の連載部分しか残っていない）と、尹永春の「郭沫若論」である。さらに郭沫若の日本人・佐藤富子の「私の夫・郭沫若」韓国語訳と佐藤富子に関する佳話がある。これらは、当時の韓国で郭沫若への関心が相当深まっていたことを示しており、二編の郭沫若論の論調も文学受容史において少なからぬ意義がある。関心の面は家庭生活や日本夫人にも及んでいる。このことは、この文章が日本で発表された事情を考えると、私は、大変おもしろいと思う。

新しい翻訳、研究の傾向の中で注目しているのは以下のような点である。第一に、翻訳が郭沫若の詩歌、喜劇、散文、著作など全領域に広がったことである。第二に過去に翻訳出版された作品、例えば日帝強行占領期に翻訳された「牧羊哀話」および

一九九〇年代に翻訳出版された「冢足」などの作品が新たに出版されていることである。第三に、韓国の学者が主体的な新たな思考で郭沫若の作品からもっぱら韓国人を題材にした作品を探し出し、それを四段階に分けて研究した「郭沫若の韓人題材作品研究」などが現れていることである。

さらに韓国の「韓中語言文化研究」などの学報に国際郭沫若研究の成果、たとえば藤田梨那教授や魏紅珊女士らの論文が断続的に掲載され、韓国の学界と学術交流の役割を果たしていることも指摘しておく。

郭沫若初期詩歌における大正期日本詩歌の影響

岩佐昌暉

郭沫若は大正期の日本で文学活動を始めるが、当時の日本文学からどのような影響を受けたのか具体的には語っていない。だが、彼が明治末年から大正期のほとんど全時期にわたる日本文壇から種々の影響を受けてきたことは、その「身辺小説」と日本の私小説との関連ひとつとっても明らかである。この報告は、明治末年日本に紹介され、日本の文学・美術に影響を与えた未来派の運動が、特に萩原朔太郎を媒介にして郭沫若に影響を与えたのではないかという観察を述べたい。

郭沫若の英詩訳

大高順雄

成仿吾の《論訳詩》に郭沫若訳フランスの詩人ポール・ヴェルレーヌ Paul Verlaine の Clair de Lune “月明” が紹介されている（《創造月報 18》, 1923, pp. 5~6）。周知のように、ヴェルレーヌの詩は高踏派から象徴派へ移行する詩流の嚆矢である。この創作法は音と匂いと色の照応する「象徴」世界の構築にある。それが郭沫若の詩情に訴えたのである。“月明”の訳出は郭沫若に及ぼしたフランス象徴派の影響を示す。彼の《英詩訳稿》（上海訳文出版社、1981）に収められた抒情詩五十篇は多様な色の喚起を特徴とする。この《英詩訳稿》を取り上げ、原詩と訳詩とを比較検討する。山宮允の英詩訳（訳注 現代英詩鈔、東京、有朋館、大正六年；訳注 英米新詩選、東京、宝文館、大正十四年）の影響も見られるが、それ以外に多数の英語詩が選択されている。

留学生・中国科学院院長の郭沫若が見た福岡・博多

岸田憲也

全て人が環境によって育てられるように、「郭沫若は都市によって育てられた」とも言える。実際に彼は北京・上海・四川・東京・市川・岡山・福岡等において、様々な政治・文学活動をし、多くの業績を残している。

郭沫若と福岡・博多について言えば、次の二期に分けられる。

①九州帝国大学留学期間（1918年～1924年、一時帰国を含む）

②訪日科学代表団団長としての福岡訪問期間（1955年12月16

日(19日)

前者は、留学生として福岡の地を踏み、『女神』をはじめとした文学作品を書き残し、現代文学史に与えた影響は計り知れない。後者は、日中の国交がなかった当時、日本学術会議の招きで、東京・大阪・福岡等を訪問し、のちの国交正常化に大きな影響を与えた。その際、「訪日雑詠」をはじめとした多くの旧体詩を残している。

本発表では、郭沫若が福岡・博多で書き残した詩文、特に旧体詩について分析し、彼が見た、また彼を見た当時の都市の様子や役割について考察したい。

『女神』と海水浴

小崎太一

『女神』の中で、博多湾の波は詩人と自然との調和、『文芸論集』の「文芸の生産過程」に云う「芸術は内部から発生する。その受精は内部と外部の結合であり、魂と自然の結合である」その結合を表しているが、特に「浴海」では、海水浴を通して詩人は波と一つになっていて、身体を通じた調和の最も直接的な表現となっている。田漢の口を借りて博多湾は、「和児を抱いて海水浴した」場所とも表現されている。このように海水浴は、郭が育った四川沙湾の自然にはなかった、福岡の自然の地方色の一つだといえるが、日本ではその普及は一八八一年以降だとされ、また最初それは病氣治療を目的としたものだった。そして一九〇五年から

次第に娯楽として変化した、いわゆるモダンなものだった。福岡での娯楽として海水浴の流行は、郭が滞在していた一九二〇年前後からだとされる。本発表はこのように、郭文学にみられる福岡の自然への認識を、一部改めることを企図している。

郭沫若がしたためた聶耳墓志銘の削除問題について

斉藤孝治

中国の国歌「義勇軍行進曲」の作曲者聶耳が一九三五年七月、神奈川県藤沢の鶴沼海岸で遊泳中、行方不明の末、水死体となって見つかったことは、日中間でもそれなりに知られた歴史的出来事である。

その頃、千葉県市川で亡命生活を送り、聶耳とも縁が深かった郭沫若は、新中国成立後、聶耳の故郷、雲南省昆明に建立された彼の墓碑に銘を贈っている。

碑文は、一六九文字から成り、簡朴ながら荘重な名文だが、その最後の句「聶耳的）不幸而于敵国之憾無拔。其何以致溺之由、至今犹未能明焉」が日中間においてこの間、わだかまりになっていたことは、あまり知られていない。

というのも日本では、聶耳の死は「溺死」と受け止められているのに対し、郭沫若の句は、溺死に疑問を投げかけているからである。

聶耳の死については、この間、中国においては「謀殺説」がいわれ続けてきた。

そうした状況下、中国における聶耳研究の第一人者とされる向延生(中国芸術研究院音楽研究所研究員)が溺死を裏付ける、といったも過言ではない客観的事実を明らかにした上で問題の句を碑文から削除すべきだという論文「也談《聶耳墓志銘》的刪改」をまとめ、問題提起している。

日中間の歴史認識は折にふれてうんぬんされるだけに郭沫若がしたための聶耳の碑文問題を思考してみたい、と思う。

郭沫若と聞一多

——聞一多の郭沫若『女神』評価を巡って

鈴木義昭

本発表では、中国の現代詩人の双璧である聞一多と郭沫若の繋がりに——特に、青年期の一時期——について確認を行いたい。

聞一多には、郭沫若の処女詩集『女神』(1922年8月出版 上海泰東書店)を論じた論文が二編ある。すなわち、一九二三年六月の「郭沫若『女神』的時代精神」、同年十月の「郭沫若『女神』的地方色彩」である。すでに周知の通り、この二編は、元来、同一篇であったが、掲載紙「創造週報」の紙幅の関係から、二篇に分けて掲載されたものである。前者においては、『女神』の持つ現代性を高く評価したのに対して、後者においては、中国詩としての独自性が欠如していることを厳しく批判したのであった。本発表では、それを同一編と考えながら、後年は聞一多と隔たりがあるように見える郭沫若との関係を一瞥し、併せて、その底流に

ある批評精神について述べたいと思う。

郭沫若歴史劇と焦菊隱

瀬戸宏

郭沫若の歴史劇『虎符』『蔡文姬』は北京人民芸術劇院の重要なレパートリー作品である。北京人芸は“郭・老・曹”すなわち郭沫若の歴史劇および老舍『茶馆』、曹禺『雷雨』の上演を通して自己の舞台芸術の特色を形成し、中国最高の劇団との名声を獲得したのである。『虎符』『蔡文姬』『茶馆』の演出は焦菊隱である。焦菊隱は北京人芸の第一副院長、首席演出家を務め、『雷雨』の演出夏淳は焦菊隱の弟子であった。だから、北京人芸の芸術風格の形成は、基本的に焦菊隱演出の結果である。『蔡文姬』は一九四九年中華人民共和国建国から一九七九年改革開放開始までに中国で発表された話劇戯曲のうち今日でも上演される極めて数少ない戯曲の一つでもある。本発表では、『蔡文姬』を中心に、焦菊隱演出作品の芸術的特徴および初演時の中国社会との関連について分析することとしたい。

郭沫若の甲骨研究

一 郭沫若と文求堂田中慶太郎

成家徹郎

郭沫若は一九二八年に日本へ亡命してから、中国古代史の研究に精力を注いだ。彼は古代史(主に殷周史)を研究するには、同

時代の文字資料である甲骨文と青銅器銘文を読む必要があると考えた。甲骨文について何の知識もなかった彼は、田中慶太郎の教示を得て、東洋文庫（東京）へ行つて関連資料を閲覧し研究を続けた。

そして一九三〇年に『中国古代社会研究』（上海聯合書店）を出版した。続いて翌年には上海の大東書局から『甲骨文字研究』と『殷周青銅器銘文研究』を出版した。しかしその翌一九三二年には文求堂から『两周金文辞大系』（洋装版一冊）、『金文叢考』、『金文餘積之餘』が出版された。これ以降は、古文字関係の著作はみな文求堂から出版されるようになった。

田中慶太郎は、単に著作を出版しただけでなく、研究に対しても協力した。またさらに田中一家と郭一家は家族ぐるみのつきあいをした。郭氏の古文字研究を考える際は、田中氏の協力援助を軽視してはならない。文求堂が出版した甲骨関連の著作は以下の通り。

『卜辞通纂』（線装本四冊）一九三三年五月
『殷契餘論』（『古代銘刻彙考一』）『古代銘刻彙考』（線装本三冊）一九三三年十一月

『古代銘刻彙考続編』（線装本一冊）一九三四年五月
『殷契粹編』（線装本五冊）一九三七年五月

また青銅器銘文の方面では最初の著作『殷周青銅器銘文研究』は一九三一年に大東書局から出版されたが、これ以後は文求堂から出版された。

『两周金文辞大系』（洋装版一冊）一九三二年一月
『金文叢考』（線装本、全四冊）一九三二年八月

『金文餘積之餘』（線装本）一九三二年十一月

『古代銘刻彙考』（線装本、全三冊）一九三三年十二月

『两周金文辞大系図録』（線装本、全五冊）一九三五年三月

『两周金文辞大系考釈』（線装本、全三冊）一九三五年八月

また慶太郎の次子震二は郭氏について甲骨金文の勉強をしていた。そして郭氏の金文関係の著作三篇を翻訳した。これも一九三五年に文求堂から出版された。『青銅器研究要纂』。

田中慶太郎は一八八〇年（明治十三年）京都に生まれ、一九五一年に逝去した。郭氏より十二歳年長であった。次子震二は一九一一年に生まれ、一九三六年夭折した。享年二十六歳。

本篇は、郭氏の甲骨学研究に対する慶太郎の協力援助を明らかにしようとするものである。

郭沫若の古代研究

——近代学術におけるその位置づけ

牧角（竹下）悦子

中国近代においては、文学・思想のみならず学術の分野においても革新的な研究業績が数多く生まれたことは周知の通りである。中でも、古代に関する研究は、甲骨・金文資料の発掘と解読と相俟って、それまでの古代観を大きく覆す画期的な見解が数多く世に問われた。王国維の甲骨文解読、顧頡剛の古代史研究、周一多の古代文学研究と並んで、郭沫若の古代研究は斬新であると同時に独自の視点を持つ。その郭沫若の古代研究の特性について、

それを同時期の近代学術の中で位置づける試みを行いたい。

郭沫若の万宝常研究の動機に関する考察

藤田梨那

一九三六年、日本亡命中の郭沫若は隋代の音楽家万宝常に関する論文を中国と日本で発表した。音楽に縁遠い郭沫若はなぜこの時期にこのような研究をしたのか。林謙三『隋唐燕楽調研究』を翻訳、出版したことは直接的契機となったが、その動機の奥に亡命期に始めた甲骨文字研究で、王国維に対する傾倒、同情から、権力によって抹殺され、歴史に埋没された文化人を発掘し、再評価する強い意図があった。『中国古代社会研究』『私は中国人』に見られる王国維、羅振玉に対する郭沫若の評価が手かりになる。また林謙三が『隋唐燕楽調研究』で基づいた『隋書』『唐書』と郭沫若が用いた資料との照合によって、「応声」及び「八十四律」に対する二人の着眼点の違いを検証することによって、郭沫若の万宝常研究の根拠を明らかにすることができる。万宝常の存在と彼の音楽的貢献を明らかにすることは、日中両国の音楽史研究に大きく貢献することになる。この点において、郭沫若の研究の意図があるといえる。

『女神』における詩的言語としての科学

横打理奈

郭沫若の処女詩集『女神』は、同時代の聞一多から「時代精神」として評価され、同時にその新しさ故に「地方色彩」を無視した

と批判されたことで知られる。そのように評価された要因の一つが、外来語など新しい語彙の積極的な利用である。それら語彙のうち、英語や日本語などをそのまま音写したものや、思想や政治に関する専門用語については、これまでもしばしば論じられてきたが、医学や科学に関する専門用語についてはあまり論じられてこなかった。当時の科学については、ともすれば迷信の打破・神話の否定といった非文学的な役割を考えがちだが、しかし一方で科学の言葉はこれまで目にしたことがなかった新しい世界を物語る詩的言語として機能し、文学的な役割も果たしていた。実際、同時代の郭沫若が留学していた大正期の日本では、そのような作品が登場していた。本発表では、この詩的言語としての科学用語に注目して、『女神』の作品を再評価してみたい。

郭沫若の佚文「雁来紅」について

小谷一郎

ここに取り上げる郭沫若の佚文「雁来紅」は、郭沫若が日本亡命中、中国人日本留学生が刊行した雑誌『戯劇芸術』に発表されたものである。

「雁来紅」の執筆年月日は三五年「九月六日」。そこには副題として「給『君』的一封信」とあり、文末に作者は不明だが「附誌」が付いている。

『劇場芸術』は、「北方左連」の関係者である梁夢迴、陳辛人等と、三十年代日本における演劇活動の嚆矢となった中華同新劇会第一回公演、曹禺「雷雨」の上演に携わった杜宣、邢振鐸、吳天等によって三五年十月十日に創刊された。編輯者は林果（邢振鐸）、発行者は張若雲である。

「雁来紅」は、龔濟民・方仁念『郭沫若年譜』（天津人民出版社 1983年5月）の「三五年」の項にも記述がない。八八年十一月に出版された王錦厚・伍加倫・蕭斌如編の上下本『郭沫若佚文集』（四川大学出版社）にも、九二年に出版された郭沫若著作編輯委員会編『郭沫若全集』（人民文学出版社）にも収録されていない。

郭沫若「雁来紅」については、中国現代文学史資料彙編（乙種）『郭沫若研究資料・下』（1988年8月）所収の上海図書館編「郭沫若著訳系年」に、「載一九三五年十月『劇場芸術』創刊号。注；此篇篇目見自一九三五年九月十日『質文』第三期広告欄。『劇場芸術』由日本東京劇場芸術社出版」とあるだけである。上海図書館の編者の記述は、この「劇場芸術創刊号広告」（しかも、この「広告」は『劇場芸術』創刊から一ヶ月も前のもので、実際とは異同がある）に依っただけのもので、郭沫若の「雁来紅」そのものは見えていないと推測される。

本報告は、こうした郭沫若の佚文「雁来紅」について、「附誌」を含め、その全文を示し、郭沫若「雁来紅」執筆の背景、郭沫若と『劇場芸術』との関係などに論究したものである。

■新入会員紹介■

以下の方々が新たに入会された。

岸田憲也（九州大学大学院人文科学府・博士課程）

立松昇平（拓殖大学教授）

呉瓊（九州大学大学院）

間ふさ子（福岡大学）

■ご寄付への感謝■

今回の研究会開催にあたり、会員は言うに及ばず、杉岡先生はじめ、非会員からもご寄付をいただきました。心よりお礼を申し上げます。（ご芳名は別紙会計報告II五十音順、敬称略）また、学会参加外国人の宿舎「ルポ県庁口」経営の（株）玄南荘（湖上高当社長）にも親身のご協力をいただきました。

寄付の総額は84万円になり、報告集発行経費を含め、ちょうど予算内で会議を開催できました。ご協力を感謝いたします。遅くなりましたが、挟み込みの別紙（会計報告）をご確認ください。

【編集後記】

▲ 日本初の郭沫若研究国際シンポが開催されてはや五カ月も経つ。大会二日目中国の研究者たちを郭一家がかつて一ヶ月も泊まった佐賀県北山中にある温泉街に連れて行ったことがいい思い出になった。中国には温泉がないわけではないが、露天温水プールみたいなので水着のまま「混浴」になる。熊の川温泉での「裸のふれあい」は中国のお客さんたちにとってエキゾチックでいささか過激な体験となったに違いない。途中気持ちが乗ってきたのか、カメラを取り出してばち撮ったり、露天プロで流行歌を歌ったりする方もいれば、うたれ湯を浴びながら声を上げて詩を吟じたりする方もいた。当日女将さんが気を遣って風呂を貸しきりに近い状態にしてくれたのでよその客に迷惑を掛けずに済んだ。

▲ 開会式にわざわざご来駕いただいた中国駐福岡領事館・武樹民総領事の祝辞、手違いで原稿を頂戴しておらず、掲載できない。残念でしかたがない。お礼とお詫びを申し上げる（武）